日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No.10, 275-286 (2009)

木戸幸一の認知構造の把握
—認知科学による戦争責任の検証—

竹田　勇吉
日本大学大学院総合社会情報研究科

Kido Koichi's Mental Frame as a Politician
—A Cognitive- scientific Approach to his Responsibility for War—

TAKEDA Yukichi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

What mental factors led Kido Koichi to decide on the start of the Pacific War? In order to make this point clear by using methods of cognitive science, it is necessary first of all to analyze his frame of mind or 'cognitive structure.' According to Kido's system of beliefs, which constitutes a factor of his mental structure, it was the most important thing to see things as they really are, and to do his utmost in the political difficulties of the time. This meant his effort to know himself and realize what he was born for. His idea of the meaning of life supported his determination to preserve the 'Emperor System' and 'protect the national polity.' So far as he saw, to lose the war, that is, to enter into war not in order to win but to lose was the only way to preserve the Emperor System. This is how his irrational judgment led him to a decision to adopt the pro-war policy.

はじめに

1941 年 7 月 2 日の御前会議で国家として公式に戦争を決意する決定がなされた。この会議で運命の決定に参加した 15 名の最高指導者のうち､敗戦後現存していた元首相の東条英機、閣僚であった平沼騏一郎、松岡洋右そして陸海軍の将軍であった武藤章、岡敬純、鈴木貞一などが東京裁判において A 級戦犯として起訴された。しかしながら東京裁判においては、これら御前会議の出席者だけでなく、内大臣木戸幸一をふくめ A 級戦犯全員が異口同音に戦争責任を否定している。キーナン検察官の最終論告ではこのように述べられている。｢元首相、閣僚、高位の外交官、宣伝家、陸軍の将軍、元帥、海軍の提督及び内大臣等より成る現存の 25 名の被告全ての者から我々は一つの共通した答弁を聴きました。それは即ち彼らの中唯一人としてこの戦争を惹起することを欲しなかったというのであります・・」。

なぜ最高指導者たちは欲してもいない決定をしたのか、丸山真男は、これらの証言は最高指導者の自己弁護であり、既成事実への屈伏と権限への逃避であると断定しているが [(1)]、いずれにしろ非合理的な政策決定がなされてしまったのは事実である。このような非合理的な政策決定がなぜなされたのか。

本研究ではこれを解明するために認知科学の手法を用いる。これは、人間の心理的な構造（認知構造）を明示化したうえで、意志決定モデルに適用する行動分析の手法である。認知科学では、人間の行動は「心」の介在なしには説明できないとする。そして、スタインブルナーらによれば [(2)]、人間の心理には外部からの情報をなるべく単純化しようとしたり、自己の信条体系に反するような情報を回避しようとするメカニズムが働くという。こうした説は上述の非合理的な政策決定の分析にも適用できるのではないか、そのように筆者は考えた。政治家の行動に関する心理学的アプローチについては、土山實男がいうように、仮説や命題は示されてはいるが、まだ体系的な視角をもつには程遠い状況にある [(3)]。しかし、政治家がなにゆえ特定の政策に固執して現実に盲目となり、後になってみれば非合理的としか思えない

政策を選択し、大きな失敗を犯すことになるのか、その過程を政治家の心理に立ち入って分析する手法としては価値があるのではないかと、筆者は考える。

本稿は、認知科学の手法を用い木戸幸一の戦争責任の検証をするための第一ステップ、心理的な構造（認知構造）の把握である。そこでこれまでに研究された木戸の人物像や思想そして政治行動といった木戸をめぐる諸見解を第一に捉え、木戸の全体像を知る第一歩とした。つぎに木戸の経歴からかれの人格形成の源を探り、そのうえで木戸幸一日記の中での発言や書籍そしてその所感などから認知構造を把握している。まとめとして、本稿で把握した木戸の認知構造と、先行研究から得られた木戸の政治行動、人物像が、どのように結びつくのか関連性について言及し、認知構造の検証としている。

1. 木戸幸一を取り上げる理由

太平洋戦争の開戦に重大な関与をした人物としては、東京裁判での A 級戦犯をその対象にあげることができる。そのうち軍人の戦争責任は当然問われるものとして、民間人では、広田弘毅、木戸幸一、松岡洋右、白鳥敏夫、平沼騏一郎、星野直樹などが対象となる。本研究の第一段階では民間人として唯一人絞首刑となった広田弘毅をとりあげた [(4)]。従来の一般的見方では、広田の行動や政策決定は、軍部への屈服や現実への諦めの結果とされていた。しかし、認知科学の手法によって分析したところ、広田の一連の政策決定行為は彼自身の信条体系によるものであり、本人においては確信に基づく「合理的な」行為であったことが判明した。ゆえに広田の戦争責任は免れがたいものであるという結論となった。

本研究では、第二の段階として、15 年戦争突入後、軍部の路線に同調したことにより日本を開戦に導いたとされる木戸幸一を選択した。天皇を取り巻く元老西園寺公望や木戸幸一など、いわゆる宮中グループは、軍部の冒険主義的対外行動を抑制し、また立憲君主制の形骸化を阻む役割を果たしたとされてきた。しかし、昭和天皇の死後、天皇側近に関連する資料が登場したことで、宮中グループの政治的役割、なかでも政党内閣終焉以後、旧世代に取って代わって天皇側近となった近衛文麿と木戸幸一らの影響力の大きさが浮かび上がってきている。このうちとくに昭和天皇の第一の側近だった木戸幸一の場合、本人の日記や東京裁判資料など、認知科学的分析に必要な記録が豊富に残されている。つまり木戸幸一は認知科学の手法をもちいて分析するのに最適な人物のひとりなのである。

2. 木戸幸一をめぐる諸見解

2.1 木戸幸一の人物像について

木戸の人物像を詳細に描いているのが、東京裁判において木戸の弁護を担当した作田高太郎である [(5)]。木戸という人物は、まさに「偉大なる平凡」で、一切の事を経験、法律知識および該博なる常識によって、淡淡と処理していく近代的ビジネスマンであると述べている。これは木戸がいかにも官僚的な能吏であったことを裏付けている。さらに木戸には、世の推移と事物の実相を見誤らない聡明さと、世の毀誉褒貶など眼中に置かない確固たる信念とがあり、果断なリアリストであるとも述べている。木戸の弁護人だったせいもあるだろうが高い人物評価である。

木戸がリアリストであるという点は、平沼内閣で厚生大臣を務めた広瀬久忠も認めている。常に平々担々、合理と実際を貫徹するのが木戸の特徴で、それは役人時代ばかりでなく政治家や内大臣になってからも変わらなかったという [(6)]。有馬頼寧も、近衛文麿と性格を比較しながら、近衛が「理想家」であるのに対して、木戸は「現実家」、つまりリアリストであると評している。それゆえ近衛は、木戸の知恵を借りて自分の構想を実現しようとしたところが多分にあったのだという [(7)]。近衛と木戸の人物比較という点では、和田小六の女婿である都留重人の学友、ハーバート･ノーマンが次のような評価をしている。近衛に対する辛辣さに対し、都留との関係からか木戸には好意的である。

> 「木戸は果断で鋭敏な人物であり、友人でかって後援者であった近衛とは対照的に、心が決まれば敏速に行動する・・木戸は精力的に忙しくかけまわる小男で、才気立つ人というより秩序立った考え方をする頭脳のすぐれた人物である」[(8)]。

保阪正康は、5.15 事件後の収拾にあたっての木戸のリアリスティックな行動を高く評価している [9]。木戸は切迫した現実の中で的確に判断行動できる人物だったということである。

「木戸は内大臣秘書官長として、実にツボを得た動きをしていますね。内大臣は牧野伸顕ですが、牧野よりはるかに現実の中に身を置いて動いていることがわかります。正確につかんでいる」

以上のようないくつかの人物評価からみると、木戸の人物像はこうまとめることができよう。木戸幸一は、秩序立った考え方をする合理主義者であり、また事物の実態を見誤らないリアリストであり、しかも心が決まれば一貫して行動する果断さも持ち合わせた人物であった。このような性格は、太平洋戦争終結の「聖断」が下される過程においても、木戸の実際の行動の中に見ることができる。1944 年 6 月、サイパン戦の敗北が明らかになった段階で、現実派の木戸は、戦争の継続は壊滅的な敗戦を招き、ひいては国体＝天皇制の崩壊につながることを予知していた [10]。同じ時期の近衛との会見の中で木戸は次のような発言もしている [11]。

「なるべくこのまま東条にやらせて最後の機会－相当の爆撃と本土上陸を受けたるとき－方向を一転する内閣を作り、宮殿下に総理になって戴く」

この時すでに木戸は、国民を犠牲にした上で、東条英機への責任転嫁による終戦工作のシナリオを冷徹に描いていたのかもしれない。

2.2　木戸幸一の思想について

木戸幸一の思想で特徴的な点のひとつが右翼的傾向である。いくつかの先行研究でそれが捉えられている。ハーバートノーマンは、木戸が平沼内閣の内務大臣となったとき、それまで隠れていたに違いない、はっきりと反動的、国家主義的態度が木戸に表れたと述べている。たとえば、内務大臣在任中に、脅迫的な示威運動が暗黙のうちに政府から鼓舞されイギリスに向けて行われていたことや、平沼男爵との結び付きがその例である [12]。同じ時期に、この反英運動について報告を受けた元老西園寺公望が、やはり木戸の思想を

「木戸はなかなか聡明なところがあるが、性格的に右傾のところがある」

と指摘している [13]。

岡田昭三は、木戸の右翼的傾向の要因として体質的に国家主義に傾きやすかったことをあげ、それは封建的環境に育った貴族や地主たちには概ね見られる傾向であるとも述べている [14]。この封建的環境の影響については、木戸幸一自身も対話の中で、大名華族と旧家臣との関係を取り上げ、儒教倫理的な忠君思想があったことを認めている [15]。

「旧臣関係というのは、以外に根強いものです。旧臣連中は、殿様に対して、天皇の次ぐらいの敬意を表していました」。

木戸の右翼的傾向はどの程度であったのか、東京裁判での供述から推定することができる。木戸は、満州事変以来の戦争の開始・拡大の責任はもっぱら軍部に転嫁していた。そして責任があった人物として、橋本欣五郎、石原莞爾、南次郎、荒木貞夫、真崎甚三郎、板垣征四郎らをあげているが、その中で金谷範三、宇垣一成、鈴木貞一については一線を画する評価を下している。つまりクーデターによる急進的な国家改造路線をとらない形でのフアッショ化路線に対しては宥和性を示していたのである [16]。

もうひとつ木戸の思想で特徴的な点を、重光葵の『巣鴨日記』の中に見出せる [17]。

「木戸は今日巣鴨に於て確かに毎日を愉快に、裁判が如何なろうと何の未練もなしに過ごしている人である。従って他の多くの人々の様な不平を同君の口からは聞く事を得ぬ。彼は自由を奪われた自由の人である」。

さらに加えると、木戸はしばしば行われた全裸の身体検査にも他の被告のように屈辱感にさいなまれることがなかった。すなわち、木戸は慣れ親しんだ生活や、地位や権威の世界から、ありのままの、現実性の世界に容易に転換することができたのである。実際、死刑判決も覚悟していた木戸は、わずか一票差で無期・終身刑となって巣鴨拘置所に入ってからは、日記の中に、

「何もかも失って裸になり、自由に生活できるようになり大いに愉快なり」

と自身書いてる [18]。ありのままに見ることは政策決定にも影響していた。

2.3　木戸幸一の政治行動について

政治行動に関する先行研究では、第一に岡義武による『木戸幸一日記』の「解題」をあげることができる[19]。『木戸幸一日記』は、戦後、東京裁判で重要な証拠物件の一つとして取り上げられ、その後木戸日記研究会により公刊されたもので、わが国の近現代史の研究においてきわめて重要な位置を占めている。木戸日記研究会に参加した伊藤隆によると、出版当時存命中の木戸幸一が、全部一字一句変えないで出して欲しい、何か問題が生じたら自分が全責任を負うという発言があったことから、収録したこれらすべて原文のままにできたと述べている[20]。この『木戸幸一日記』の中で、岡義武は木戸が終始重要な一員であった宮中グループの役割を以下のように述べ、軍部と対抗する政治勢力という点を重視した評価を行っている。

「宮中グループに属するひとびとが軍ファシズムの巨大な重圧に対抗し、あるいはこれを牽制しつつも、わが国が満州事変、日中事変を経て太平洋戦争へと突入して行くのをついに防ぎとめえなかった。・・また、本土決戦に猪突しようとする軍部を宮中グループに属するひとびとが辛くも阻んで、我国を和平へと導いた。」

木戸幸一が、軍部に対抗する政治勢力の一員としての評価を受けることになったのは、『木戸幸一日記』での記述に加え、東京裁判にあたって徹底的に自己弁護の方針で臨んだことも寄与している。都留重人より、自己の無罪を立証することが天皇の無罪につながるという助言を得たことで大義名分を持っていた。そこで尋問に対して木戸の基本的な立場は、満州事変以来の侵略戦争の開始・拡大の責任はもっぱら軍部にあること、また自らも含めた天皇・宮中グループを軍部の対抗勢力として位置づけ、その戦争責任を回避しようとしたのである[21]。従って、木戸の口供書は克明な日記にもとづき宮中、軍部、政府の最高首脳の動きを綿密かつあからさまに告げていた。とりわけ隠した過去をあばきたてられることになった陸軍関係の被告は、木戸に対して反感を燃え上らせたが、木戸は全く動じることなく決意した路線を貫いている[22]。

岡義武と同様な立場に立つ三谷太一郎の場合[23]、軍部との対抗面だけでなく、共生面も挙げている。三谷によれば『木戸幸一日記』は軍ファシズムの台頭に対する「権威主義国家」の対応の記録である。明治10〜20年代に成立した日本の「権威主義国家」は、軍ファシズムに対して対抗面と同時に共生面をもっていた。それが「権威主義国家」のシンボルである天皇であり、その天皇の威信を利用して軍ファシズムのもつ反権威主義的傾向を抑制しようとしていた。さらに三谷は、木戸幸一が権威主義国家の秩序とその象徴である天皇の威信の維持をすべてに優先させるという政治的価値観を持ち、それが木戸の政治的生涯を貫いた行動準則を生みだしたとも述べている。その意図が鮮明に表れたのが例の東条首班奏請である。このとき木戸は、一方では対米開戦の可能性を考え、東条内閣に戦時内閣としての役割を期待しつつ、他方では対米交渉が妥結した場合に起こりうる軍内部の不満を、軍＝東条英機自身の手で抑えさせようとしていた。つまり国家の秩序の維持をつねに意識していた。すなわち、木戸は天皇の威信を利用して、対米開戦を回避しようと努めながらも、それにもまして内乱を回避することに心を砕いていたというのが三谷の見解のあらましである。

この三谷の見解を裏付けるものとして、後継首班推薦のために開催された重臣会議での木戸自身の発言が『歴代総理大臣伝記叢書第27巻』に掲載されている[24]。その発言は秩序を守る、まさに内乱の回避がその主たる理由であった。東条首班奏請については異なる意見がいくつかある。三宅正樹は、内大臣としての木戸は、消去法によって、つまり宇垣をはずし、及川をはずし東条を選んだと主張している[25]。結局、最悪の選択肢を最善のものと信じ選びとったと結論づけている。安井淳はこれらとはまた別の見解を持っている[26]。内大臣木戸にとって、天皇の御信任がなければ何の用事もなく、またそれでは内大臣として一日も勤まらないことを認識していた。つまり天皇の信任を得ることが第一義であった。天皇が後継首班に東条を強く推していることを知った木戸は、開戦を主張する東条を、骨抜きにする条件は付けたものの、意に反して奏請した、というのが安井の考察である。

三谷の見解を批判するのが藤原彰である。宮中グ

ループには明白な戦争責任があるとしている [27]。藤原は、昭和天皇が統治権の総覧者として自ら権限を行使し、大元帥として直接戦争指導に当たっていたと主張する。大権を行使する天皇の「聖意」を調整する立場にあった宮中グループは、確かに軍部に対しては批判的な態度をみせることが多かったが、あくまでもそれは暴走や行き過ぎを批判するにとどまり、本質的には反対の立場に立っていなかった。つまり彼らは、天皇の側近として天皇大権を戦争防止に利用しうる地位にありながら、それを行使しなかった。さらに藤原によれば、「貴族」である宮中グループの思想、価値観の基礎には、民衆蔑視あるいは民衆への恐怖感があったという。それが彼らと一般国民との間に深い溝をつくりだし、彼らの思想や行動を制約したのである。また、自分たちの特権階級的地位への本能的な防禦姿勢のゆえに、宮中グループは徹頭徹尾、天皇制のもっとも忠実な擁護者となった。要するに彼らは支配層の代表、代弁者であり、結局は軍部の敷いたコースに便乗し、戦争とファシズムを推進した最高の戦争責任者であるという結論である。原秀成も木戸らの本能的な防御姿勢を見出している。原は『日本国憲法制定の系譜』の中で [28]、敗戦後の憲法改正への過程で、木戸幸一がなんとしても大日本帝国憲法と、「国体」を「護持」しようとしていたことを取りあげ、「国体」が木戸にとって、自分とその子孫の安寧を保障する重要な遺産であったからと解釈している。つまり、木戸らの特権階級的地位への防御姿勢を読み取っている。

吉田裕は、つぎつぎに公表されている天皇側近の日記類から、軍部の対抗勢力とする岡義武の説は一面的といわざるを得ないと述べ、宮中グループが軍部の路線に便乗していったと論じている。しかもそれをリードしたのは近衛文麿や木戸幸一に代表される、より若い世代に属する人々であったことをあげ、天皇も、元老西園寺公望に比べ、近衛や木戸の唱える路線に同世代人として親近感をいだいていたと述べている [29]。軍部の路線に便乗していったとする先行研究としては、前述の藤原彰や吉田裕のほか粟屋憲太郎の『木戸幸一尋問調書』の解説や [30] 小田部雄次の『華族』の研究 [31] の中に同様の見解を見出すことができる。藤原彰は宮中グループの責任を論じているが、鳥居民はさらに掘り下げ木戸幸一自身にこそ全責任があったと、次のように厳しく断じている [32]。自分が生き残るために木戸は近衛を売ったのだとその動機を鳥居は記している。背後には私怨があったとも論じている。

「戦争開始の責任者は軍令部総長の永野修身ではなかった。参謀総長の杉山元でもなかった。首相、陸相を兼任した東条英機でもなかった、ましてや近衛文麿であるはずがなかった。内大臣木戸幸一に全責任があったということだ」

宮中グループには明白な戦争責任があるというこれらの研究に対して問題を提起しているのが伊藤之雄である [33]。昭和天皇が政治に関与し、実際に影響力を及ぼすことができた事例をいくつかあげても、それだけで、すべての場合において関与と影響を及ぼしたことにはならないというのが伊藤の主張である。そして、昭和天皇の政治的機能を評価するには、天皇の意思決定を支える者の動向や、天皇の行動が慣行の枠内か、自発的なものなのか、さらに、国家の政治危機を回避するために、軍も含めた官僚機構との調整を昭和天皇がどの程度行ったかも重要な視点になると述べている。これらの観点が、藤原らの研究に欠落していると指摘している。

伊藤之雄は、若槻礼次郎内閣が満州事変を収拾できなかったのは、弱気の若槻首相に対して昭和天皇、牧野内大臣ら宮中側近、そして民政党の閣僚もただ傍観するだけであったためと論じている。すなわち、元老をはじめ天皇側近は各人自らが、軍部や国粋主義者の批判の矢面に立つことを嫌って、事実上の傍観に近い行動をとったと分析している。結局、昭和天皇は大権を保持していたが、必ずしもすべての場合において、政治に関与し影響力を及ぼすことができたわけではなかった。また、牧野内大臣ら宮中側近にしても、明治天皇を手本として天皇親政を意図したが、満州事変以降、軍部や、国粋主義者の強い反発のため、自らを擁護する傍観者的行動に走らざるを得なくなったということである。御厨貴も、木戸は主体的な政治家ではなく、その真骨頂は、官僚的正確性や官僚的細部へのこだわりを体現した宮中官僚にあったとし、政治家としては、元老西園寺のある部分を代行した限定的なものと結んでいる [34]。

以上のように、木戸幸一の政治行動に関する先行研究には、木戸の政治行動の基準に関して三つの意見が見出されている。第一は、権威主義国家の秩序とその象徴である天皇の威信の維持にすべてに優先させていたという見解。第二は、自分たちの特権階級的地位への本能的防御が、つまり自己本位の個人主義が行動基準であったという見解。第三は、軍部や、国粋主義者の強い反発から自らを擁護するために、あるいは単に一官僚としての立場を維持するために、というような主体性を喪失した行動基準が見解としてあげられている。

いずれにしても、現段階では木戸幸一の政治行動、また戦争責任に関して、学会においてその見解は一致していない。そこで視点を変え、太平洋戦争の開戦に関与した人物たちの思想、信条あるいは心情などで、その精神的内面に立ち入り、当事者の心理的メカニズムに関与し、彼らの戦争責任を検証してみようというのが、本研究の試みである。

3. 木戸幸一の経歴と人格形成

1889年（明治22年）7月18日、侯爵木戸孝正の長男として東京に出生した。木戸孝允の孫にあたる。幸一が生まれたのは、大日本帝国憲法発布の年であり、翌年には教育勅語が発布される。伊藤博文らが、憲法と教育勅語を柱に苦心のすえ作り出した「天皇の日本」、「天皇の国民」のまさに第一期生が木戸幸一の世代であった。したがって、天皇崇拝を中核とするいわゆる「国体の精神」が、彼の信条体系に刷り込まれたことは充分予想できるところである。とはいえ、木戸の信条体系の全てが国体観や伝統的観念で埋め尽くされたわけではない。木戸が信条体系の基盤となる人格を形成していった時代は、日本が天皇を頂点とする集権国家として整備されていった時であるが、それは欧米の思想文化の影響がますますひろがっていった時でもある。明治後半から大正にかけての思想文化の影響を強く受けながら、木戸は人格形成をしていったのである。すなわち、大正デモクラシーの思潮、新カント派の理想主義、文化主義、あるいは無政府主義や社会主義などの洗礼を受けながら、しだいに木戸はありのままの姿を凝視する実存主義的傾向を強めていった。

しかしながらその中に、丸山真男が、

「近代日本人の意識や発想がハイカラな外装のかげにどんなに深く無常感や『もののあわれ』や固有　信仰の幽冥感や儒教的倫理によって規定されているか・・。むしろ過去は自覚的に対象化されて現在のなかに『止揚』されないからこそそれは背後から現在のなかにすべりこむのである」

と言うように[(35)]、木戸の場合、新しい時代の実存主義的人格が必ずしも固まらないまま、国体思想が、また儒教的倫理からの伝統的思想がすべりこんできたように思える。

学習院に学んだ後、木戸は京都帝国大学法科政治学科に1911年に入学する。入学直後、河上肇から初めて社会主義の講義を受け大いに関心をもつようになる。私淑した戸田海市教授からは、労働階級の苦悩や社会改造の必要性について、さらに行政学と経済学との融合が将来の行政官としての自分の使命であると教えられる[(36)]。両教授の薫陶を受けたことにより、木戸は人間の柔軟さや幅の広さを好むようになった。

近衛文麿（公爵）や織田信恒（子爵）、原田熊雄（男爵）らは木戸の大学時代の同窓で、彼らとは後に太平洋戦争開戦に至る政策決定過程で、深く関わり合うことになる。木戸の卒業席次は6番と優秀であったが、高等文官試験には苦労し、戸田海市教授の推薦で農商務省に入った[(37)]。1915年12月、児玉源太郎の娘鶴子と結婚する（媒酌人伊藤博邦公爵夫妻）。1917年には父孝正の逝去により侯爵を授爵し、同時に貴族院議員となった。

その後、商工省へ転じた木戸は、1930年には商工省臨時産業合理局第一部長兼第二部長へ昇任する。臨時産業合理局は、後に非常時における官界の花形部署となり、いわゆる革新官僚と呼ばれる人材を輩出した。国家統制主義の革新官僚たちとの出会いがきっかけとなり、木戸は国家社会主義に傾倒していったとも考えられる。いずれにしても、新時代の先端ともいうべきポストに配されたことは、華族にしては木戸が相当の能吏であっことを窺わせる。しかし木戸は、世襲の貴族院議員でもある自分が、重要な官職を塞いでいるのではないかと考え、近衛文麿

の推薦を機に同年10月、内大臣秘書官長兼宮内省参事官に転じてしまった。秘書官長の件で牧野内府に接した際、「少しも所謂老人の頑固なところはなく、如何にも幅の広い考へ方をなさるリベラルな方」という好印象をもつ。また、就任翌々月には西園寺公を訪問するが、やはり同様の印象をもった。この二例から木戸が好ましいと考える人格が推察できる。彼は、近代化に必須の柔軟さや幅の広さを備えた人物に好感を抱くのであった。

他方、木戸が儒教倫理的な忠君思想の持ち主でもあったことが、彼の日記の随所に見受けられる。たとえばその代表的なものが木戸家ゆかりの旧長州藩への思いである。藩の象徴でもある毛利侯爵や小早川男爵にまみえる時には、木戸はかならず「君臣の儀」をもって臨み、旧幕時代さながらに主君の威光にひれ伏した。そしてつねに長州閥の結集に心を砕いたのである[38]。

秘書官長時代の7年間は、浜口首相の暗殺に始まり、9・18事件、三月・十月事件、5・15事件、2・26事件などまさに政変・事件の連続であったが、大過なく任務を果たしたと木戸は日記の中で述べている。しかし、一連の事件にともなう軍ファシズムの台頭は、天皇とその側近の政治的役割をかつてないほど重要なものにし、宮廷の政治化をもたらした。それを端的に表したのが、天皇の常時輔弼を任ぜられている内大臣の政治的比重の増大である。当然その秘書官長である木戸の役割も大きくなった。

その後、木戸は文相、厚相、内相を歴任し、開戦前年の1940年には内大臣の重職に就任した。政変に際しての後継首班奏請での決定的な役割や、新体制運動による準戦時体制へ向けての近衛文麿との協調、国策決定に際しての天皇への内奏など、内府として木戸は極めて重要な役割を果たした。そのため、敗戦後は戦争責任を問われ、いわゆる東京裁判で終身禁固の判決を受けることになった。死去したのは1977年、享年87歳であった。

4. 木戸幸一の認知構造の把握

本研究が依拠する認知科学の行動分析手法というのは、人間の心理的な構造（認知構造）を意志決定のモデルに用いる行動分析手法である。その認知構造にはいくつかの捉え方があるが、本研究では認知構造の要素をスキーマ、スクリプト、信条体系、オペレーショナル・コードとして捉えている。これらの要素の概念は認知科学の考え方をもとに[39]つぎのように把握している。

スキーマとは、物事の理解に先立って存在するという意味で生得的であるが、学習や体験によって絶えず修正が加えられる。人間は、単純化された世界像認識装置としてスキーマをもつことになる。つまり、スキーマというのはプロトタイプ的な知識の枠組みと考えればよい。つぎにスクリプトは、人間の行動の知識や記憶に関して、典型的な順序や流れを記述するものである。信条体系とは、パーソナリティー（人格）の上に形成された政治に対する為政者の理念と捉えられている。オペレーショナル・コードについて、アレキサンダー・ジョージが構成したものを適用する。すなわち、行為者が政治的事件の分析や、あるいは政治行為の結果を見積もる際の一種のプリズムとして作用し、また行為者の戦略や戦術の選択の基準やガイドラインとみなすものである。以上の概念をもとに木戸幸一の認知構造を把握してみたい。

4.1 スキーマ；プロトタイプ的な知識の枠組み

木戸が、学生時代から秘書官長就任の日までに読んだ書籍の数は、日記の記録によると170冊あまりである。読書に最も時間を費やしたのは学生時代で、内容的にみると文芸書が圧倒的に多いのが特徴である。木戸の学生時代は、日露戦争を経て日本が「一等国」の仲間入りを果たした後、実利優先の修養主義から教養主義へ、陰鬱な自然主義から明るい人格主義や理想主義へ、あるいは封建的儒教的な家族主義から近代的個人主義へと、教養や人格を中心に置いた個人主義やデモクラシーが主流になっていった時代であった。彼が最初に強い関心を向けたのは旧制度の打破である。それは、ラジカルな個人主義の旗手が次々と登場するイプセンの戯曲を読むことに、木戸が最も多くの時間を費やしたことで明らかである。そして早稲田文芸協会公演の「人形の家」を見たあと、新鮮さや目新しさが不足しているとの不満

を日記に記していることなどでも裏付けられる [40]。旧制度に対する木戸の反発や違和感は、武士道や軍人精神に対する感じ方にもあらわれている。たとえば乃木大将殉死の際には、乃木を評価しながらも、殉死には議論の余地があると記している [41]。新時代の知識人としては、理性によって認めることのできない行為は、つまり旧制度の思想、道徳にもとづくような行為は、同情することは出来ても讃美することは出来なかったのである。自らは忠君思想の持主であったが、旧制度的なものに拒否感や嫌悪感をしめしている。以上のことから、「旧制度的なものに拒否感や嫌悪感をしめし、新制度的なものは柔軟に幅広く受け入れる」というのが木戸幸一のスキーマであると結論できる。

4.2 スクリプト；行動の知識や規準

白樺派の理想主義は、人生に対する真摯な姿勢や、個人の完成のため古今東西の先蹤に学ぶ態度などによって、当時の青年たちを惹きつけた。木戸も白樺派の影響をうけてイプセン、トルストイ、メーテルリンクなどの作品を愛読し、それらの人生観や死生観に興味を抱いたはずである。そのことは、後年の有島武郎への傾倒ぶりからも明かである。有島の作品で木戸が最初に読んだのが『三部曲』と『叛逆者』である。前者は、人間の愛をめぐる現実、とりわけ神に背かざるを得ぬような悲劇的な男女の出会いと苦しみを描いたものである。後者は、人間の個性を強化拡大しつつ、個性と自然との融合を図るのが芸術であり、芸術家はそれを独自に表現する叛逆者たれとする芸術論の書である。一度欲したものには完全に征服するまで執着せよという有島の激しさに、木戸は共鳴したのであろうか。日記には、「同氏の小説には共鳴するところ少なからず啓発されること更に大なり」とまで記している [42]。有島武郎は、実存的生き方を日本で最初に表現した作家といわれるが、それに強い感銘をうけた木戸は、何事にも意を尽くして生きるようになったのではないか。つまり、「つねに大事なものに執着し意を尽くすこと」が木戸にとってのスクリプトであると考えられる。

4.3 信条体系；政治理念

信条体系とは、前述のごとく、パーソナリティー（人格）の上に形成された政治に対する為政者の理念である。木戸が追い求めたと思われる人格は、ありのままのすがたを凝視する実存主義的人格であり、それは当時としては新しいタイプの人格であった。ではどのようにして木戸の人格は形成されたのか。特権階級である華族の家庭では、一般的に人間関係がよそよそしく、心から信頼しあえるものでなかったといわれる。たとえば、有馬頼寧が革命を防止するため社会事業に打ち込んだのも、満たされない愛情への飢えに起因したものだったとも解釈されている [43]。しかし、同じ華族であっても、木戸の場合には家族の愛情に恵まれていた。そういう意味では例外的な環境に育ったということができる。婚約時代の鶴子との濃密な関係を木戸は思い切って書くと述べ、恋恋とその思いを綴っている [44]。率直な表現にせよ、心に響いたことを書き残そうとすることにせよ、その時々で本能的に感じたことを直接表現することで、生きていることを明示していたようである。恵まれた家庭環境にいたことが、実在するすがたを凝視する姿勢につながったように思える。実在するすがたを凝視することは、ロシア革命という華族全体の危機意識のなかで、華族と下層民との融和を図る信愛会への参加や学習院改革を志向する桜友会、さらに社会問題を議論する十一会での中心的な活動に結びつくことになる [45].

自分にとって極めて大事なものを手に入れるとき、また守ろうとするとき、あるいはそのための行動を日記に書くときに、木戸は自己の存在を確認できたのであろう。これらの行動は、彼にとっては生きている証しを示すもので、是非とも必要なものであった。そのことは、大事と思うものに、たとえば家族と過ごす時間、あるいは華族との会合に多くの時間を費やしていたことからも明らかである。「真正面から対象を凝視し、執着し、意を尽くすことで自己の存在を認識する」という木戸の考え方は、有島武郎に共鳴した新時代の知識人のものといえる。

では、その延長上で木戸はどの程度実存的思考に傾倒していたのか。さらには、そういう志向が彼の政策判断に影響を与えることになったのか。これら

の点について検証してみたい。小野紀明によると[46]、「われわれは現象の世界しか認識することができない、そこで物自体の世界に到達することができない」というカントの哲学に反旗を翻し、物自体を見ようとしたのがエドムント・フッサールとマルチン・ハイデガーである。フッサールは、合理化された世界からは物自体を見ることができないが、ありのままの、実在する、現実性の世界にまなざしを転換すれば、物自体も見えるし、意味に満ちた生活世界が表れてくると主張した。

こういうフッサールをも越えたのがハイデガーで、生活世界に留まっていてもだめで、さらに根源的な何かに向かっていかなければならないと呼びかけた。つまりフッサールのいう意味に満ちた、慣れ親しんだ生活世界を解体しなければ、根源的な何かには到達できない。意味連関に満ちた世界が解体されたときにこそ、意味を失ったものそのものがありありと現れてくる。つまりものは実存するという学説である。実存主義的な志向が強かった木戸であるから、フッサールの唱える「ありのままの、実在する、現実性の世界へとまなざしを転換する」というステップは踏んでおり、彼の内面では瞬間的に生活世界が表れていたであろう。しかし、さらに根源的な何かをつかむには、生活世界の解体、突破が必要である。木戸もそれを考えていたはずである。

ところが、日本において実存主義的に自己の存在を主張していけば、そこには重大な問題が立ちはだかった。ホッブスが唱えた個人のもつ不可侵の自然権、つまり人間に生得の自由権と、欽定憲法の定める天皇主権との矛盾である。事実、木戸はそのことに悩んでいた。日記には[47]西田幾多郎の『善の研究』について、

「西田先生が個人ありて経験あるにあらずして経験ありて個人あるものなりと純粋経験の説を語られし件一道の光明を認めて個人主義より独我論に陥れる考えを救って得たる如く感ぜし」

と述べるなど、個人主義的な自由権は正当か否か煩悶し、救いを求めていた様子が窺える。結局、木戸が肯定し選択したのは、「天皇の国民」、「天皇の日本」という道であり、自由権の肯定＝天皇主権の否定、国体の解体という道ではなかった。木戸の行き着いたところは、立憲君主制を否定してまでも天皇親裁を護持するという国家社会主義の路線であった。国体に対して陰謀を企てるのは言語道断と明言する木戸にとって[48]、天皇主権の否定は、「万世一系の皇位を以て統治権の所在とする国体の思想を守る」という自己の信条大系を根底から覆すものであり、意思決定のプロセスから当然のごとく外されていたと思われる。要するに木戸は、自己の存在は認識できたかもしれないが、実存を意識し自己の存在を主張することはできなかった。自己の主体性を示すことなく、国民の主体性を信じず、あくまでも天皇の権威に頼ろうとしたこの弱さが政策決定の場面において、開戦に結びつくような判断や行動をとらせることになったのではないかと考えられる。

以上のことから、木戸幸一の信条大系は、「真正面から対象を凝視し、執着し、意を尽くすことで自己の存在を認識するという考えのもとに、万世一系の皇位を以て統治権の所在とする国体の思想を守る」というものであったことは明らかである。

4.4 オペレーショナル・コード ; 判断基準・ガイドライン

オペレーショナル・コードは、政治家ならば政治的事件の分析や、政治行為の結果を見積もる際の一種のプリズムとなり、また戦略や戦術の選択のガイドラインにあたるものである。したがって、オペレーショナル・コードには認知構造が形成されていく時代の政治思想や社会状況が反映されることになる。

大正時代を特徴づけるのはデモクラシー思想の発展と民衆運動の高揚である。その代表が吉野作造の民本主義であるが、すでにふれたとおり木戸はもうひとつの新しい思想、無政府主義と社会主義にも、新時代の知識人として興味をもった。京都帝国大学で社会主義を河上肇から学んだ木戸は、当時の学界の最新情報を知ると共に、社会改造の必要性を強く認識するようになった。社会主義の概念はエンリコ・フェリーの『社会主義と近世科学』から得たと述べている[49]。木戸はフェリーの説をこう理解した。

「何びとにも人間の生活を保証される権利があり、各人が平等な境遇で人格を発達させるには出発点

において平等であるべきで、何びとも競争上の特点を有してはならない。不平等な社会を改革するには、私有財産の廃止と共有化が必要である。」

だとすれば、日本は天皇主権の立憲君主国であるべきとした木戸にとって、社会主義は認めがたいものだったはずである。そして主権在民の民主主義も受け入れ難かったと思われる。つまり木戸は、革命を唱える社会主義よりも、穏便な社会改造論や社会改良論に親近感をもっていたのである。こうした傾向は、当時国内で起こった米騒動や労働運動に対して、木戸があまり共感を寄せなかったことにも表れている [50]。では、木戸の描く社会改造はどのようなものだったのか。木戸は、農商務省入省から2年後に、河合栄治郎、小平権一、本位田祥男、村井四郎ら10数名の人びとと読書会をスタートさせた。これは社会主義や社会改良についての勉強会で、唯物史観に対する河合の見方や本位田の消費組合論などを論じ合った。後には、岸信介、小島新一、井野碩哉なども加っている。学生時代から農商務省時代にかけての勉強から、木戸が社会改造に関して得た結論は、労働者を社会の中心にすえ、労働組合を基盤とする賀川豊彦の運動に近いものであった。すなわち信愛会で賀川豊彦の講演を聞き、

「G．D．H.コールのギルド社会主義、労働運動は大体同感の様子なり。之余の意見と略一致する・・」

と述べている [51]。しかしその後、木戸は考え方を変えることになる。

昭和恐慌が到来したとき、木戸は商工省の臨時産業合理局第一部長の職にあり、経済政策の前線に立って深刻な不況と格闘していた。この経験を経るなかで、木戸は『統制経済の理論』の著者本位田祥男や竹内可吉、小平権一、岸信介など革新官僚の統制経済論に共鳴し、国家社会主義という第三の流れに立場を変えるようになったと思われる。この変化は、革新派華族の一人だった木戸にとってみれば、自然の流れだったのかもしれない。ロシア革命以後、革命に対する危機感を共有していた革新派華族は、信愛会、十一会、桜友会、火曜会など多くの会合をもち、政治的結合を強めていた [52]。経済恐慌の深刻化、海軍軍縮条約問題、満州問題、政変・事件の連続など、内外一斉に危機が噴出した1931年には、既成政党への嫌悪感を強めていた木戸は、岡部長景らと政治教育運動の実行について話しあっている [53]。一方、近衛文麿、酒井忠正、岡部長景らは、安岡正篤を精神的支柱とする国維会を後藤文夫とともに起ち上げた。日本精神による国家の革新を目指したその路線が、軍部革新派、革新官僚、それに革新派華族を国家社会主義の流れに引き込んだと考えられる。さらに、1930年に木戸が内大臣秘書官長に就任した直後の浜口首相の暗殺、その後の政変・事件の連続の過程で、軍ファシズムが台頭するとともに、宮中グループの政治的役割がかつてなく増大していった。木戸も、政治的な戦略・戦術を選択するためのガイドラインの必要性に迫られていたはずである。その際、木戸が選択したのは、「天皇親裁のもとでの国家社会主義路線」というオペレーショナル・コードの設定であったと考えられる。

4.5　認知構造のまとめ

表1　木戸幸一の認知構造

要素	認知構造
スキーマ	旧制度に関連することは拒否し、新たな制度を柔軟に、幅広く取りいれる
スクリプト	木戸にとって、つねに大事なものに執着し意を尽くす
信条体系	真正面から対象を凝視し、執着し意を尽くすことで自己の存在を認識するという考えのもとに、万世一系の皇位を以て統治権の所在とする国体の思想を守る
オペ・コード	天皇親裁のもとでの国家社会主義路線

おわりに

まとめとして本稿で把握した木戸の認知構造と、先行研究から得られた木戸の政治行動、人物像が、どのように結びつくのかその関連性を述べてみたい。

第一には、木戸の人物像がリアリズムに徹した合

理主義者として描かれるのは､｢真正面から対象を凝視し、執着し意を尽くすことで自己の存在を認識する｣という彼の信条体系に由来するものと思われる。

第二に、木戸の右翼的傾向についてであるが、前述の如くこの傾向は人格形成以前に刷り込まれた国体思想の表れである。しかもこの国体思想は理性的なものというより､感情的なもののように思われる。木戸日記の中で政治的行動、事件に対する感情的な表現は数少ないが、国体に関する事柄には理屈抜きの感情表現で反応することが多いのが理由である。

第三に、木戸の政治行動に関する研究者の見方は大きく三つに分かれるが、国体を守る行動、すなわち、天皇制を擁護する、天皇親政を意図する行動をとったという点については意見が一致している。これは木戸の信条体系とはどのように結びついているのか。木戸の人格は、対象を凝視し、執着し意を尽くすことで自己の存在を認識することである。けれども、その一歩先の慣れ親しんでいる生活世界を解体すること、つまり国体を解体して個人の自由権を主張するという行動をとることはなかった。自由権の肯定＝天皇主権の否定、国体の解体という道は選択しなかった。それは自由権が人間に固有のもので根源的なものであることを理解していなかったからではなく、天皇主権の否定という選択肢を初めから木戸は持っていなかった、つまり国体の思想を守るという信条体系が、天皇主権の否定という選択肢を初めから占め出していたからと考えられる。木戸にとって国体を守ることは当然のことで、そのことは終戦の聖断が成功した理由として、次ぎのような外部圧力の寄与をあげていることからも裏付けられる。

｢それと､むしろ原爆とソ連の参戦ということは、これには（終戦には）プラスになった点もある。おそらくあのとき、原爆がなくてソ連が参戦していなかったら、ひょっとして成功しなかったな。原爆の犠牲は大きかったけれども・・。｣

軍部の暴発を抑え、終戦の聖断を成功に導くのには、国体を背景にした天皇の権威では不足であり、強力な外部圧力が必要であったと述べている(54)。木戸のありのままに見る目は､15年戦争突入後､｢天皇の軍隊｣を統制するには天皇の権威に頼る体制から､何らかの変革が必要なことをすでに捉えていた。それにもかかわらず、天皇主権を否定し、｢天皇の軍隊｣を解体するという政治行動をとることはなかった。それは自己の信条大系を根底から覆すものであり、意思決定のプロセスから当然のごとく外されていたからと考えられる。あるいは、木戸は天皇制を維持するためには、戦争に負けるしかないと考えたかもしれない。このような木戸の思考過程が太平洋戦争の開戦にも結びついていったように思える。けれども本稿ではまだ総括的な結論をくだすことはできない。

以上のように、本稿で把握した木戸幸一の認知構造は、先行研究から得られた結果を充分説明できるものである。今後、この明示化された認知構造を適用し、木戸の思考過程の分析・推定、検証などを段階的に進め、戦争責任について究明していきたい。

[注]

1. 丸山真男『現代政治の思想と行動』未来社、1957年、102－112頁。

2． John Steinbruner,The Cybernetic Theory of Decision ,Princeton:Princeton U.P.,1974

3. 白鳥令『政策決定の理論』東海大学出版会、2001年、113－114頁。

4. 「認知科学をもちいた広田弘毅の研究」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第9号、2008年

5. 作田高太郎『天皇と木戸』平凡社、1948年、1－5、230-236頁。

6. 多田井喜生『決断した男木戸幸一の昭和』文芸春秋、2000年、40頁。

7. 御厨貴監修『歴代総理大臣伝記叢書第25巻』ゆまに書房、2006年、438頁。

8. 粟屋憲太郎『東京裁判への道　上』講談社、2006年、102-103頁。

9. 保阪正康他『昭和史の一級史料を読む』平凡社、2008年、200-228、29－31頁。

10. 米国戦略爆撃調査団『太平洋戦争史証言記録』大井篤訳編、日本共同出版、1954年、143－150頁。

11. 纐纈厚『｢聖断｣虚構と昭和天皇』新日本出版社、2006年、38－39頁、101-112頁。

12. ハーバート・ノーマン『ハーバート・ノーマン全集』大窪愿二編訳、岩波書店、1989年、342頁。

13. 多田井喜生『決断した男木戸幸一の昭和』文芸春秋、2000 年、166 頁。
14. 岡田昭三『木戸日記私註』思想の科学社、2002 年、170 頁。
15.『湯浅泰雄全集 12』白亜書房、2006 年、363 頁。
16. 粟屋憲太郎『木戸幸一尋問調書』大月書店、1987 年、536-544 頁。
17. 鴨下信一『面白すぎる日記たち』文芸春秋、1999 年、160－170 頁。
18. 新人物往来社編『教科書が教えない歴史有名人の晩年』新人物往来社、2005 年、244-246 頁。
19. 木戸日記研究会編『木戸幸一日記上巻』東京大学出版会、1991 年、42 頁。
20. 伊藤隆『日本近代史　研究と教育』出版地不明、1993 年、17－27 頁。
21. 粟屋憲太郎他『木戸幸一尋問調書』大月書店、1987 年　536 頁。
22. 児島襄『東京裁判　下』中央公論新社、2007 年、120-125 頁。
23. 三谷太一郎、『近代日本の戦争と政治』岩波書店、1997 年、263－280 頁。
24. 御厨貴監修『歴代総理大臣伝記叢書第 27 巻』ゆまに書房、2006 年、104-116 頁。
25. 三宅正樹『ユーラシア外交史研究』河出書房新社、2000 年、
26. 安井淳『対米戦争開戦と官僚』芙蓉書房、2006 年 157-168 頁。
27.藤原彰『天皇制と軍隊』青木書店、1998 年、182 頁。
28. 原秀成『日本国憲法制定の系譜』日本評論社、2006 年、371-374 頁。
29. 吉田裕『昭和天皇の終戦史』岩波書店、1993 年、11－37 頁。
30. 粟屋憲太郎他『木戸幸一尋問調書』大月書店、1987 年　539－545 頁。
31. 小田部雄次『華族』中央公論新社、2006 年、232 頁。
32. 鳥居民『近衛文麿「黙」して語らず』草思社、2007 年、77 頁。
33. 伊藤之雄『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』名古屋大学出版会、2005 年、2－4 頁、282-296 頁。
34. 天川晃他『日本政治外交史　転換期の政治指導』放送大学教育振興会、2007 年、75－87 頁。
35. 丸山真男『日本の思想』岩波書店、2004 年、11－12 頁。
36. 前掲『木戸幸一日記上巻』3-4 頁。
37. 木戸幸一『木戸幸一日記』歴史民俗博物館、1914 年 10 月 16 日条、1915 年 2 月 11 日条
38. 岡田昭三『木戸日記私註』思想の科学社、2002 年、56 頁。
39. 有賀貞他編『講座国際政治２』東京大学出版会、2001 年、72－79 頁。
40. 前掲『木戸幸一日記』1912 年 3 月 16 日条
41. 前掲『木戸幸一日記』1912 年 9 月 14 日条
42. 前掲『木戸幸一日記』1921 年 3 月 2 日条
43. 後藤致人『昭和天皇と近現代日本』吉川弘文館、2003 年、51 頁。
44. 前掲『木戸幸一日記』1915 年 8 月 13 日条
45. 前掲『木戸幸一日記』1919 年 5 月 31 日信愛会、1920 年 10 月 10 日桜友会、1922 年 12 月 11 日十一会、。
46. 鷲見誠一編『転換期の政治思想』創文社、2002 年、155-164 頁。
47. 前掲『木戸幸一日記』1913 年 2 月 1 日条
48. 前掲『木戸幸一日記』1928 年 4 月 26 日条
49. エンリコ・フェリー『社会主義と近世科学』樋口秀雄訳、金港堂、1909 年、14-15 頁。
50. 前掲『木戸幸一日記』1918 年 8 月 15 日条-米騒動に民衆ではなく役人の立場で発言。
51. 前掲『木戸幸一日記』1921 年 9 月 27 日条
52. 前掲『木戸幸一日記』1924 年 1 月 18 日条－貴族院に対する美濃部達吉講演、1924 年 3 月 24 日条－吉野作造華族問題に関する講演、1924 年 6 月 11 日条－十一会など。
53. 後藤致人「大正デモクラシーと華族社会の再編」『歴史学研究』第 694 号、青木書店、1997 年、32 頁。
54. 湯浅泰雄『湯浅泰雄全集第 12 巻』白亜書房、2006 年、410 頁。

(Received:December 31,2009)
(Issued in internet Edition:February 8,2010)